

雉種類

りて後の音便なるべし、原は必清音なり、今かくおもひ得たるもまた同じ傳の十三廿四なる、無名雉

を明せる條に、此度の御使に、かく雉鳥をしも撰びて遣はせしは、如何なる所以にか測難けれど

も、漢籍どもを見るに、雉は物聞こと聴く、又よく耿介を守る鳥なりと云れば、さる由にぞ有けむ

かし、禮記月令に、季冬之月云々、雉註に、謂陽動則雉鳴而句其頸也、前漢書五行志に、雉者聽察、先

とあるに據れば、漢書の聽察は、キ、シルとも訓べき事を思ふべし、か、れば岐藝志は正しき名

なるを、萬葉集卷三右に、淺野之雉卷八右に、安佐留雉卷十右に、春鷄鳴卷十二右に、片山雉卷

十三右に、野鳥雉動卷十九左に、左乎騰流雉又八峯之雉等見えたるは、傍假字を誤れるなり

此事も記傳卷十一左に、萬葉十四丁にも、吉藝志とあり、他卷に雉とあるも、皆如此訓べきを、今

と見えたるが如し、但し如此誤れる原は、倭名抄卷十八羽類に、廣雅云、雉音智、上聲之重、和名、野雞

也、古本には、鷓亦作雉、また、鷓居苗反、鷓音ト、雉也、とあるよりなるべし、其所以は如何にといふに、須はスの音シユなる

事云までもなけれど、摸虞韻と支脂之韻とは、互に通ふ古音の例にて、シの假字とせしもの此彼

見ゆれば、木々須も實はキ、シならむを、ふと通音に呼なれたるなるべし、○下

〔本朝食鑑五〕原禽雉訓木之、古須、

集解雉處處有之、東北最多、常之秋田、奥之仙臺、南部、津輕、岩城、羽之庄内、信之諏訪爲上、三越、飛州次

之、狀類鷄、而雄者頂有雙角、毛頭頸胸腹翠、黑有光、眼頰紅、背蒼、而尖背、翮采斑色、腰有長綠、毛尾長有

文采、翅短而蒼、黑斑、脛掌亦似雞、而勁、雌者黃赤、黑斑、而文不鮮、尾短、其雌雄性狡、躁好鬪、其飛勁捷不

能翔舞、其鳴則必翫、聲高響而短、呼曰鷓、音杳、雉本屬離火、應胃土、故陽動震、則必鳴而句其頸也、其

味最美、以供上饌、通神以尊廟祀、冬月可食、春後肉臞、脂少而不佳、月令曰、仲冬雉始雉、至春二三月而

伏卵、其卵褐色、白亦有、比鷄卵則稍小、味亦不減、鷄卵也、雌伏卵時、潛伏于叢中、雄不離近境、狐狸猫犬